

## 新旧「セーラームーン」アニメの比較による ジェンダー理解の変容について

山田利博

### On the Transition of Gender Understanding by Comparing the Old and New Animation of “Sailor Moon”

Toshihiro YAMADA

はじめに：本稿の問題意識

マンガ月刊誌『なかよし』1992年2月号から1997年3月号に連載された、武内直子『美少女戦士セーラームーン』（以下、マンガ原作を指す時は、「原作」と略称）は、疑いもなく日本マンガ・アニメ史上における画期的な作品の一つである。何故それが画期的になり得たのかという問いに対する答えはいろいろと考えられるが、今回はジェンダー意識の問題、特に「原作」とアニメではどのように異なるか、あるいは同じアニメでも、時代によってどのように異なるかについて見ることにする。なぜならこのマンガは、後述するように、ジェンダー意識を中心に近いテーマとして扱った作品であり、かつ、20年の時を隔てて2度アニメ化され<sup>1)</sup>、時代によるジェンダー理解の変遷が窺いやすいと判断したためである。ただその分析に入る前に、確認としてジェンダーの定義について簡単におさらいしておこう。

言うまでもなくジェンダーとはもともとは文法用語である。フランス語などのように、有性名詞が存在する言語の性の分類を示すものとして用いられていたが、今ではそれが、「社会的・文化的に形成された性別」の意味にまで広げられている。なぜなら、人間は高度で複雑な社会・文化を創り上げてしまったため、「生まれた時の性」（セックス）と「社会的・文化的に形成された性別」を区別する必要があるが出て来てしまったためである。この辺りの経緯は複雑な内容とそれなりの歴史を持っているので、本稿の中でそれを逐一辿ることは不可能であり、また本稿の主眼もそこではないので、比較的端的にまとめられた若桑みどりの次の一節を掲げることで、本稿におけるジェンダーの定義とする。

「男らしさ」「女らしさ」のように、「性にもとづく固定的な観念」や、この固定的観念と生物学的機能の差異の上に築かれた「性別役割分担」、そして、これらをもとにして、あるいはこれらと補いあってつくられた、「男性は社会、家庭、企業、団体の中心であり、女性は周縁である」ことを自然なこととする男性中心主義の通念、習慣、法律、諸制度、文化ができあがった。これが「社会的・文化的性差」としてのジェンダーである。(2007:P.13)

「女らしさ」と並んで「男らしさ」という言葉も挙げられているように、ジェンダーの枠をはめられてきたのは男性も同じであるが、現在、男女共同参画社会が叫ばれているように、圧倒的に「らしさ」を強いられてきたのが女性であることは、「原作」よりずっと早い時期に男勝りの少女を主人公とした少女マンガ『リボンの騎士』を研究した押山美智子が次のように述べていることでも証される。

一つの投書で全てを押し量ることはできないとは言え、「サファイヤはやっぱり女の子のほうがいい」との見方が数ある投書の中から編集部によって選り出され、なおかつ「そう思うわ」と同意されている点には、少なからぬ意味が含まれているように思われる。殊に手塚の元に多く届いたという「私も男の子の姿をしてみたいわ」（注は割愛：稿者）との意見を編集部側が一切黙殺していたことを考慮に入れると、その意向はより明らかだと言えるであろう。編集部サイドにとってサファイヤは、男の子のような立ち居振る舞いをしていても、あくまで「女の子」であることが重要であり、サファイヤが「女の心」を手放し、「男の子、同然の存在になることなどは問題外でしかなく、決して認められないことだった。「男の子」の姿をしてみたいわ」という読者の少女たちの願望は、まさに「男の子の姿」をするレベル、すなわち表層的に男の子の格好を真似る程度に留められる必要があり、その意味でサファイヤの「男の心」への同一化、すなわち男性性の〈内面〉化は、編集部にとってまさに超えてはならない一線であった。（2007:P.35）

押山によればこれは1955年のことであるし、「日本アニメーション学会 第17回大会 基調シンポジウム」報告（P.44）によれば、今の制作者はそれほど強くジェンダーを意識していないとのことであるから、ここまでのことはないと思われるが、それでも全くなくなったわけではない。これも若桑の言葉を借りれば、「ジェンダーは、長い歴史をもっており、しかも複雑で大規模な構造なので、私たちはそのなかにどっぷりつかって生きている」（2007:P.14）からである。私見に依ればそのことをかなり明確に示すのが、「原作」と、それをアニメ化した二つのシリーズなのである。節を改めて説明する。

## 1. 「原作」の要件

まず「原作」は、間に『ベルサイユのばら』等々も存在するため、直接の裔とは言いがたいが、『リボンの騎士』のように、男勝りの女性、換言すれば男性に依存すまいとする女性を主人公とする作品だということである。これは単にその外形に止まらず、内容にまで反映する。例えば、須川（2013）がセーラー・ジュピターこと木野まこと、石田（2016）がセーラー・ウラスこと天王はるかに注目し、管見の及んだ限りでは、まだそれに注目した論は発見出来ないが、他にセーラースターライトも存在するというように、女性でありながら外見は男性というキャラクターが常に存在するからである。それだけではなく、木野まことは外見は男のようでも女性であることが最初から明かされ、趣味も料理と園芸という、女性らしい設定がなされているが、後二者はその正体が長く秘され、天王はるかなどはレーザーという設定までなされているため、周囲の者は悉く男性と誤認するというように、話が進むにつれ、敢えて男と女の垣根を崩壊させているようにも見える。

そのことが深読みではない証拠の一つは、天王はるかか、「男でもあり/女でもある」「戦士」(⑦ (2004) : P.74)<sup>2)</sup>と位置づけられることである。彼女がまだ正体を隠して周囲の者が男だと誤認している時、ひょんな事から木野まことと柔道をするようになったが、その時、極めてジェンダー色の濃いやりとりが存在することもその証拠の一つである。天王はるかは一切の手加減をせず木野まことを投げ飛ばすのだが、その時一緒にいた愛野美奈子（周知の如く彼女はセーラーヴィーナスであるから、まさに女性性の体现者と思われる）は、「ひどいっ/かよわい女のコを/ホンキで/投げなんてっ」と抗議するが、それに対して天王はるかは、「——男女差/なんて/カンケーないよな」「——女だから/男に/勝てなくて/とうぜんって/思ってたのか?」「そんなんで」「たいせつな人を/守れるのかな」と応じるし、投げられた本人である木野まことの思いは、「……くやしい/女だから/負けたなんて/思いたくない」であった(⑥ (2004) : PP.118~9)。

しかし、大方察しがつくように、この作品でもっとも大きなジェンダー的問題が孕まれるのは、セーラームーン・月野うさぎとタキシード仮面・地場衛の関係においてである。なぜなら、リボンの騎士サファイヤも、最後はフランス王子と結婚して普通の女の子に戻ってしまった、換言すれば男性に庇護される女性になってしまったからで、「旧アニメ」しか見ていない者は、後述するように、セーラームーンもその例外ではないと思っているだろうからである。しかし、「原作」の設定はそうではない。その顕著な例を三つほど見てみよう。

- I 「ありったけの/力をこめるんだ/力が/たりなければ/オレが/きみに力を注ぐ」  
「きみの仲間の/かわりに/オレがきみを/助ける」  
「ずっとそばに/ついでいる/セレニティ」 (③ (2003) : P.95)
- II 「迷ったり/不安になった/ときは/オレが/力になる」  
「こんな 無力なオレを/君は ここまで/よびよせてくれた/もしも オレを/必要として/  
くれるなら」  
「ありったけの/オレの命の力/ぜんぶ 君に/あずける/君のものだ/うさこの/力になるため/  
に/オレの命は/あるんだ」  
「だから/君は/迷わずに/戦え」 (⑤ (2003) : P..214)
- III 「うさ」  
「……オレは/おまえに/負担ばかり/かけてるな」  
「……オレには/きみの力の/カケラさえも ない/それどころか/足を ひっぱるいっぽうだ」  
「——オレたちの/未来は もう/きまっ/てるだろ？」  
「オレは/このさき ずっと」  
「おまえの輝ける/夢や未来の/足でまといにしか/ならないんじゃないかって」  
「……ときどき/思えて/くるんだ」 (⑨ (2004) : P.24)

順に説明すれば、Iは、セーラーマーキュリー、マーズ、ジュピター、ヴィーナスの四守護神を倒し、遂にその巨大な正体を現した、セーラームーン第一の敵ダーク・キングダム首領クイーン・メタリアにひるむセーラームーンにタキシード仮面が言ったもの。視力を失ったこともあって、傍点を付したように、タキシード仮面はセーラームーンのそばにいても戦わない。IIは、やはり四守護神と引き離され、タキシード仮面とともに第二の敵ブラック・ムー

ンの首領デス・ファントムの前に飛ばされてひるむセーラームーンに対してタキシード仮面が言ったもの。ここでもタキシード仮面は、「戦え」とセーラームーンをけしかけるだけで戦わない。一番情けなく見えるⅢは、第四の敵デッド・ムーンにより、胸を冒された地場衛（この時はタキシード仮面とはなっていない）が、月野うさぎに思わず弱音を吐く場面である。この三つを総合すれば分かるように、「原作」のタキシード仮面は決してセーラームーンより上位には位置していない。コミックス旧版にしかない武内直子のコメントだが、この作品のコンセプトが、「オンナノコはつよくななくっちゃね。ホラ、ワタシたちがダイスキ♥"なオトコのコたちをまもってあげなくっちゃね」（旧版①（1992）：P.76）であるからだろう。

ここに、「ワタシたちがダイスキ♥"なオトコのコたち」という文言がある如く、「原作」は決して、女性の方が上位だとも言っていない。その端的な象徴は、サイドストーリーではあるが、「原作」ショートストーリーズ①（2004）に収められる「ちびうさ絵日記 第2話 七夕にご用心！」で、すっぴんを見られて牽牛に嫌われてしまったのではないかと誤解した織女が、地球の女の子たちを洗脳し、「これからは/女ひとりで/生きる時代/手に職をもち/女も自立して/仕事に/生きましよう！」「オトコ/なんて/信用/できな—いっ」「男なんて/いらぬい/ぞ—っ」「お—っ」とシュプレヒコールをする集団を作り上げたのに対し、セーラーちびムーン（セーラームーンと地場衛の娘）が、「おばさんっ/まちがってるわよ！」「男の人が/いなきや/子孫は/ふえないもん/女だけじゃ/生きていけないわよ！」（PP.44-6）と止めに入るといふ、まるで今日の男女共同社会の先駆けのような話まで存在することである。

また、直接にはタキシード仮面が登場しないため、ここまででは引用できなかったが、Ⅱの場面の少し前には、タキシード仮面が、ちびうさばかりかばうことに嫉妬したセーラームーンに対してジュピターが言う、

Ⅳ 「なぜ あいつが/ちびうさを/あんなに/たいせつにするか/わかるか？」

「ちびうさが/うさぎとの子ども/だからだよ」

「あいつは/役割を/ちゃんと/考えてる/うさぎを/自由に/動けるように/してやりたいんだよ」

（⑤（2003）：P.58）

という、まるでキャリアウーマンの理想のようなセリフも存在する。

以上を総合すれば、「原作」がいかにかにジェンダー意識の高い作品であるか納得されたであろう。これがアニメ化されるとどうなるか。節を改めて分析しよう。

## 2. 「旧アニメ」

前節で指摘した、「原作」が極めてジェンダー意識の高い作品であることは、「旧アニメ」の時点でも理解はされていたようである。非売品ということで実物は未見であるが、須川（2013：P.138）によれば、その企画書には次のような文言が見られるという。

今、日本は女の子を中心に動いています！軟弱で頼りなく、既成の古い概念をいまだに捨てきれない男の子たちを尻目に、彼女たちの活発さは勢いを増すばかり（中略）。女の子たちは、心の中でいつも「もっともっとキレイになりたい」「もっともっと賢くなりたい」「もっと

「もっとかわいくなりたい」と願っています（中略）。「賢く、お洒落にカッコよく」それがアイドル低迷期の今、女の子の目指しているニュー・アイドル像なのです！最初はとまどい気味の男の子たちも、やがて彼女たちの真の魅力に気づくことでしょう<sup>3)</sup>。

企画が男性であった割にはずいぶん頑張っていると思うが、子細に見るとやはりずれていると思われる点もないわけではない。例えば、「もっともっとキレイになりたい」と思っている女の子はあるいはいるかもしれないけれども（しかしこれすら、村瀬（2003）によるとだいぶ怪しい）、「もっともっとかわいくなりたい」というのは、男性に媚びることになるから良くないということは、若桑（2003）にも書かれている。つまりこれは、当の企画書自身が言っている、「既成の古い概念をいまだに捨てきれない男」性視点によるものという限界を孕んでいるのである。

その端的な表れはタキシード仮面の位置づけで、前節で確認したように、「原作」のタキシード仮面はほとんどセーラームーンのそばにいるだけの、むしろか弱い存在と言えるが、「旧アニメ」では先に引用したセリフは三つとも存在しないし、誰も印象深く記憶していると思うが、タキシード仮面はいつもカッコ良くセーラームーンを助けている。特にそのとき彼が常に使うアイテム、通称「薔薇手裏剣」<sup>4)</sup>が問題で、そのようなものは「原作」には一切登場しない<sup>5)</sup>。先にも述べたように「原作」には、タキシード仮面がセーラームーンを助ける場面が基本的に少ないからである。

「原作」にないと言えば、月野うさぎが地場衛にすぐでれでれして目がハート型になってしまうのも、そうである。確かに月野うさぎは地場衛に好意を持っているから、頬を赤らめるくらいのシーンは存在するが、目がハート型になることは全くない。

「新アニメ」と違い「旧アニメ」は、「原作」とほぼ同時期に制作されていたから、「原作」に追いついてしまい、オリジナルシーンを入れなければならなかった<sup>6)</sup>事情は理解出来るが、ここで取り上げた事象は、そうした必然性は窺われないため、やはり先ほど指摘した、ジェンダー意識の未熟さによるものと思われる。約言すれば、ジェンダーに対する理解は一応浸透してきたが、まだまだ男性中心社会であったため、そこには自ずと限界があったということである。

「旧アニメ」200話の脚本を書いた者は全部で10名だが、名前だけでは男女が判断出来なかった中野睦を含めたとしても、女性は2名である。その中野睦は1話しか書いていないから、話数で言うと168話、約84%が男性による脚本ということになる。アニメの内容が脚本によって決まるものか、演出（＝監督）によって決まるものか判断出来なかったので、念のため演出家にも触れておけば、全13名中女性はただ一人で、話数にして82%が男性によるものである<sup>7)</sup>。先ほどの言葉の意味が分かるであろう。

以上のように「旧アニメ」のジェンダー理解は限界のあるものであった。では、2014年という、比較的近年に作られた「新アニメ」ではどうか。節を改めて説明しよう。

### 3. 「新アニメ」

「新アニメ」は、第一の敵ダーク・キングダムとの闘いを描く第1期、第二の敵ブラックムーンとの闘いを描く第2期、第三の敵デス・バスターズとの闘いを描く第3期の3つのシリーズ

からなる。逆に言えば第四の敵デッドムーン、第五の敵シャドウ・ギャラクティカはないわけで、そこに位置するⅢの引用に関しては、確認出来ないことになる。しかし、1、2、3期については、数か月という比較的短い時間で次シリーズが制作されたに対し、3期が終了して既に1年近くが経つにも拘わらず4期の制作は発表されないため、あるいは制作されない可能性もあるので、取り敢えず3期までの考察とする。ジェンダー的視点に立てば、この3シリーズは第1、2期と第3期の二つに分けるのが適当と思われるが、その理由も含め、以下に分析を示すこととする。

「旧アニメ」との大きな違いは、2009年から10年にかけて放映された『鋼の錬金術師 FULLMETAL ALCHEMIST』辺りから始まる、「アニメは基本的に原作そのまま」の傾向がこの作品にも反映してか、尺の都合かと思われる一部省略を除いて、セリフ・シーンともほぼ「原作」通りという点である。したがって、前述した如く初めからそこに該当する箇所が無いⅢ以外は、引用したセリフは一応存在する。ではこの20年でジェンダーに対する理解は深まったのかと問えば、やはりそうとは言えないようである。なぜなら全ての箇所に問題となる変更が含まれているからである。

まずⅠでは、タキシード仮面が視力を失っているという設定は、テレビというメディアの都合上、描くことが出来ないのはやむを得ないかもしれない。しかしこれとても勘ぐれば、男性を無力化させたくないという男の願望が感じられないことはないし、現に「原作」では目が見えないため、タキシード仮面は何もできず、セーラームーンのそばにただいるだけだが、「新アニメ」では、そのマントで、敵の攻撃からセーラームーンを庇うシーンが存在する。

また「ずっとそばに/ついている/セレニティ」は、意味的にはそれに該当すると思われる「君は一人じゃない。オレがついている」というセリフに変えられ、順番を入れ替え、他のセリフを挟んだ後、「ありったけの力をこめるんだ/力が/たりなければ/オレが/きみに力を注ぐ」が、「ありったけの力をこめるんだ、セーラームーン！クイン・メタリアのひたいのをめがけて！力がたりなければオレがきみを助ける」という、少し変化した形で現れ、「きみの仲間の/かわりに/オレがきみを/助ける」の部分は存在しない。

この変更も微細なものに見えるが、それでも、「きみの仲間（四守護神。つまり女性である・稿者注）の代わりに」という文言を削ったのは、「女性の代わりに」、つまり「女性の方が勝る」というのが、「新アニメ」の制作者には抵抗があったのではないかとも思われる<sup>8)</sup>し、「オレが/きみに力を注ぐ」が「オレがきみを助ける」に変わると、「力を注ぐ」に上下関係は感じられないが、「助ける」のは余裕のある者、すなわち上位者であるから、やはり男性に優位性が生まれてしまうことも確かなのである<sup>9)</sup>。

一方Ⅱは「原作」をほぼ忠実になぞり、「迷ったり不安になったときはオレが力になる」「だから君は迷わずに戦え」「うさこの力になるために/オレの命は/あるんだ」というセリフは存在する。しかし、「こんな 無力なオレを/君は ここまで/よびよせてくれた/もしも オレを/必要として/くれるなら」の部分は無い。男性が女性のために存在するというセリフが残ったことは評価に値すると思うが、男性が「無力」だと吐露し、「もしも必要としてくれるなら」という、ひ弱なセリフがなくなってしまったところに、一抹の男性の誇りがあるように思うのである。

そして、一番劇的に変わっているのはⅣで、ジュピターのそのセリフは全くないだけでなく、その後の「原作」でのジュピターのセリフの続き、「なによりもたいせつな/うさぎとの子ども

「ちびうさを/全力で守ることを/きめたんだよ」は、「ちびうさは あたしとまもちゃんの何よりも大切な子どもなの。だから、まもちゃんは命に代えてもちびうさを守るって誓った」という、セーラームーン自身の言葉に変えられている。これは、愛する者に対する絶対的な信頼の表明と、美しく言うことも可能だが、第三者の見解という、客観性がなくなってしまったため、愛に目が曇った者の、そうあってほしい願望というようにもとれる。つまるところ、原作者の意図から大きく遠ざかってしまった表現とは言えるだろう。

また、これは「原作」とは直接関わらないが、「新アニメ」の1, 2期でもう一つジェンダー的に問題なのは、主題歌「MOON PRIDE」の歌詞なのである。「それはアニメではない」と思う向きもあるかも知れないが、私見によればアニメとは、動き・色彩・音響等が協働して作り上げる総合芸術と思うので、やはり取り上げておく。長くなるので全文は掲げず、問題となる箇所だけ示そう。

嗚呼 女の子にも譲れぬ矜持がある

それは 王子様に運命投げず 自ら戦う意志

Shiny Make Up 輝くよ 星空を集めて

ただ護られるだけの か弱い存在じゃないわ

(下線は稿者)

作詞・作曲はRevoという男性であるが、その割には女性の気持ちを良く代弁した詞であるように、表面的には見える。しかし下線部に「にも」とあるのが問題で、ここは「には」でないと、「矜持というものは本来（すぐれた）男性が持つもので、女性には「ない」と普通思われているけれども、実はある」というニュアンスが生じてしまう<sup>10)</sup>。これが単なる語彙だけの問題ではなさそうなのは、2番の該当箇所には「には」とあるのだが、それはまた別のジェンダー的問題を孕んでしまうことで証明出来る。

嗚呼 女の子には無敵の武器がある

それは 弱さに寄り添う眼差しと 全て受け入れる強さ

(JASRAC 出1705307-701)

これは1番の例よりは程度が軽いのだが、「女の子特有の武器は、弱さに寄り添う眼差しと全て受け入れることだ」(傍点稿者)というニュアンスは、第1節に掲げたジェンダーの定義に照らせば、やはり問題であることは明らかだろう。

以上のように「新アニメ」の1, 2期は、一見女性の地位に対して理解を示しているようでありながら、その実、と言うか、多分無意識なのであろうが、男性が優位だとする考え方が、見えにくい形で残存しているとまとめられるのだが、3期になると全く事情は異なる。まず主題歌が「MOON PRIDE」でなくなったことに始まり、新しい主題歌「ニュームーンに恋して」及び3期のアニメ全体には、管見の及んだ限り、ジェンダー的に問題だと感じられる点は全くない。無論3期にも、前述した天王はるかと木野まことの柔道シーンで、最後の木野まことの心中思惟だけが削られるといった改変は行われているが、それが「原作」と大きな違いを生んでいるとは思えないし、それ以外にも、ジェンダー的問題を生じさせている改変は一つもないのである。

これが、「新アニメ」の1, 2期と3期を区分した方が良いと述べた所以なのだが、ではこの区分はどうして生まれたか。20年の時を経て少しは改善されたが、根本的にはなくならなかった意識が、わずか半年で解消された理由は、制作者の性の転換以外考えつかないのである。

「ニュームーンに恋して」の作詞・作曲はティカ・qという女性であるが、シリーズ・ディレクターも、セーラームーン史上初の女性・今千秋であった。つまり「新アニメ」第3期は、「原作」と同じく完全な女性視点で作られたものと言うことができ、それゆえ「原作」の「思考」を正しく反映できたと思われるのである。

### まとめ

以上、「原作」からしてジェンダー意識色濃い『美少女戦士セーラームーン』を、20年の時を経てアニメ化した二つの作品を対比して見えてきたことは、その20年の間に男性のジェンダー理解はだいぶ進んだが、まだまだ本質的なところからはほど遠いということであった。このことは、20年の時を隔てた他のアニメ作品の比較からも大雑把には言い得るかもしれない。例えば、原作がそうになっていると言えばそれまでだが、2014年に放映された『ウイッチクラフトワークス』のように、男性が女性に「お姫様だっこ」され、庇護されるというようなアニメは、20年前にはまず考えられなかった。しかし、せいぜい言えるのはその程度で、さらなる深い考察は難しいだろう。何故なら接点のない二者の比較は、「比較」の原義から言っても不可能だからである。そういう意味では詳細な比較が可能でかつ制作者の意識まで読み取れる、『美少女戦士セーラームーン』は希有な作品と言えるのである。

### 注・文献

- 1) 1度目は1992年3月から1997年2月にかけてテレビ朝日系列で放映されたもの（以下「旧アニメ」と略称）。2度目は、2014年7月より『美少女戦士セーラームーンCrystal』と題して先ずweb配信され、2015年4月から9月までと、2016年4月から6月までにかけて同題でテレビ放映もされたもの（以下「新アニメ」と略称）。但し「旧アニメ」は既に石田美紀（2016）も述べているように、厳密には、『美少女戦士セーラームーン』、『美少女戦士セーラームーンR』、『美少女戦士セーラームーンS（スーパー）』、『美少女戦士セーラームーンSuperS』、『美少女戦士セーラームーンセーラースターズ』と題名が変わっていくが、「原作」では一連のストーリーであるから、本稿では一括して「旧アニメ」と称する。
- 2) 「原作」のセリフ引用は、2003年から2004年にかけて出版された、講談社のなかよしKCDXにより、巻数・発行年・ページ数を付す。「」は吹き出し。/は改行。傍点等は稿者。旧版・KCDX・完全版と、3種類ある「原作」からこの版をテキストとして選定した理由は、KCDX以下は、主に時代に合わせて旧版を若干改正している（旧版では、セーラームーンの最初の必殺技は「ムーンフリスビー」であったが、「フリスビー」は特定の商品名で、広くは使えないため、「旧アニメ」でも「ムーン・ティアラ・アクション」に改変されている。KCDX以降は、「ムーン・ティアラ・ブーメラン」に修正され、「新アニメ」もそれを踏襲している。また、旧版ではフロッピーディスクだった部分が、DVD-ROMに修正される等）が、2014年7月からweb上で配信された「新アニメ」の「原作」としては、2013年11月から2巻ずつ出版された完全版は、時間的にきついのではないかと判断したためである。
- 3) 須川（2013）では全文ボールド。（中略）、傍点は須川による。



- 4) たるかす (1993: P.134) 中の用語から借用。
- 5) だから名称を借用せざるを得ないのである。
- 6) 『美少女戦士セーラームーンR』の最初13回の例が有名。
- 7) 資料は高橋 (2016) の「美少女戦士セーラームーンビジュアル放映リスト」による。
- 8) しかし、「原作」でも「新アニメ」でも I の直前でセーラームーンが助けを求めているのは、タキシード仮面に対してではなく「仲間」=四守護神なのであるから、「新アニメ」ではタキシード仮面がその代わりとなるという展開に齟齬が生じている。「仲間の代わりに」という文言がある「原作」では、それはない。
- 9) そういう意味でやはり問題となりそうなのは、「原作」だと3ページ前に存在する「セーラームーン/きみの苦しみが」「手にとるように/オレにも感じる」という、タキシード仮面のセリフが、「新アニメ」ではなくなっていることである。言うまでもなくここは、タキシード仮面がセーラームーンに共感し、理解していることを吐露する部分で、これがないと、あたかも男であるタキシード仮面は、セーラームーンの苦しみを理解し切れていないようにも感じられるからである。
- 10) 稿者の研究室の学生は、一応国語のセミプロであり、しかも全員女性で、「新アニメ」も視聴しているので、試みにゼミの時間を利用して、この部分に抵抗を覚えないかという聞き取り調査を行ったところ、4人全員が「覚える」と回答した。

#### 参考文献

- AERA Mook (2002) 『ジェンダーがわかる』朝日新聞社。
- 石田美紀 (2016) 「ずれる声——90年代アニメにおける女性キャラクター表象とフェミニスト批評」『アニメーション研究』Vol.17, No.2。
- 江原由美子他 (1989) 『ジェンダーの社会学——女たち/男たちの世界』新曜社。
- 押山美智子 (2007) 『少女マンガジェンダー表象論〈男装の少女〉の造型とアイデンティティ』彩流社。
- 齋藤環 (2000) 『戦闘美少女の精神分析』太田出版。
- ジェーン・W・スコット (2004) 『ジェンダーと歴史学』平凡社。
- 須川亜希子 (2013) 『少女と魔法——ガールヒーローはいかに受容されたのか』NTT出版。
- 須川亜希子 (2016) 「特集エディトリアル：アニメーションとジェンダー」『アニメーション研究』Vol.17, No.2。
- 高橋和光構成・執筆・編集 (2016) 『美少女戦士セーラームーン20周年記念BOOK』講談社。
- たるかす (1993) 『魔女っ子大全集』〈東映動画篇〉BANDAI。
- 日本アニメーション学会 第17回大会 基調シンポジウム「子ども向けアニメにおける少年、少女」『アニメーション研究』Vol.17, No.2。
- 村瀬ひろみ (2003) 『フェミニズム魂』海鳥社。
- 若桑みどり (2003) 『お姫様とジェンダー——アニメで学ぶ男と女のジェンダー学入門』ちくま新書。
- Pop Culture Critique 2 (1998) 『少女たちの戦歴——『リボンの騎士』から『少女革命ウテナ』まで』青弓社。

(2017年5月8日受理)